高知大学 病院ニュース

〔 編 集 〕
高知大学病院ニュース
編　集　委　員　会
委員長　福島　敦樹
〔 発行人 〕
高知大学医学部附属病院
病院長　横山　彰仁

平成27年度 医学部附属病院 年度計画概要
―附属病院に関する目標を達成するための措置―

高知大学の第二期中期目標として『人と環境が調和のとれた共生関係を保ちながら持続可能な社会の構築を志向する「環境・人類共生」の精神に立脚し、地域を基盤とした総合大学として教育研究活動を展開する。』などが掲げられています。

その中でも、附属病院は医療の進歩やニーズの多様化など医療を取り巻く環境の変化に対応するために「地域に密着した先端医療の推進と高度医療人の育成」を掲げ病院再開発も進めてきました。平成27年度は、第二期中期目標期間の最終年度でもあり、これら中期目標の達成に向けての取組を盛り込んだ年度計画としています。

1 社会ニーズに呼応した病院機能・運営を強化するため、1）本院のクオリティ・インディケーター（診療の質指標）の測定とホームページ等による社会への公表、2）感染対策、医療安全、栄養管理、褥瘡対策、創傷・失禁ケアに重点を置いた病院運営を実現する。

これらを実現するため、クオリティ・インディケーター数とその向上度で医療の質と安全を可視化し、本院の感染対策、医療安全、栄養管理、褥瘡対策、創傷・失禁ケアに関して外部評価を受ける。【42】

1）クオリティ・インディケーターの臨床へのフィードバックによる医療の質向上を図り、臨床指標をホームページで公開する。
2）外部評価等の結果に基づき、チーム医療の取り組みの改善を行い、病院機能及び質の向上を図る。

2 国立大学病院の在り方として単なる経済学的な経営効率ではなく、1）公共的価値（地域、県民の満足）と経営効率の両立、2）病院機能の「品質」の向上のため、公益性と病院収益を両立させた経営効率を実現し、満足度調査指数の向上と経営状況指標の動向で評価する。病院機能の「品質」に関しては、人的資源を適正配置し、コンプライアンス（法令遵守）の精神やセキュリティを高め、ISO9001を更新し、術前外来件数、自己血輸血実施率など医療の安全に資する評価指標を向上させる。【43】

1）患者満足度調査のデータを解析し、改善及びその効果について最終評価する。
2）新たな光線療法の実施及び技術習得の教育を実践し、先端医療の実現化を図る。
3）ISO15189（2007年版）の更新（2012年版）に向けて、品質マネジメントシステムの向上に取り組む。

3 がん診療ネットワークを構築し、診療体制を充実させるため、1）都道府県がん診療連携拠点病院として、地域のがん診療のサポート体制を強化し、2）外来機能に力点を置いたがん治療センターを充実させ、3）診療科を超えた臓器別チームや緩和ケアチームの活動を活性化し、4）院内がん登録、地域がん登録の精度を、今期6年間で、がん診療評価に活用可能な水準に高め、その水準を安定的に維持する。

これらの取組を通して、診療がん患者数、がん治療センターの患者数、がん診療地域連携クリニカルパス数、外来／入院がん化学療法比率、診療科を超えた臓器別診療の実施、緩和ケアチームの活動及びがん登録の実績増に繋げる。【44】

1）都道府県がん診療連携拠点病院として、県内医療機関とがん相談に関する連携を強化する。
2）入院診療、外来診療体制を調整し、外来化学療法患者数の増加を図る。
3）新しいがん治療の研究・開発を推進するとともに、遠隔操作型内視鏡外科手術装置（ダヴィンチ）による手術を含めた内視鏡外科手術等に携わるスタッフを養成する。
4）都道府県がん診療連携拠点病院として、がん登録に関する研修体制をサポートし、県内の実務者の育成に努める。

4 トリアージ（大災害時等における治療の優先順位）訓練に主眼を置いた院内防災訓練の充実やDMAT（概ね災害発生後48時間以内に活動できる機動性をもつ、専門的な訓練を受けた災害派遣医療チーム）訓練への参加を推進する。【45】

1）大規模災害訓練、トリアージ訓練等を行うと共に、情報伝達訓練等の部分訓練を実施する。また、病院スタッフの防災意識を高め、災害対応技能を修得、向上させる。
2）『国立大学附属病院災害対応相互訪問事業』を通じて他大学病院の災害への取り組みを知り、本院の課題を発見し、改善を行う。
3）災害・救急医療学講座と協働による災害医療教育のための講演を継続的に実施し、県下の行政・地域医療機関・救助関係機関と知識・課題の共有化を図る。
4）既存のDMATチームを継続的に訓練に参加させる。

5 先端医療学推進センターやネットワークの充実を通じて医療の進歩、社会情勢の変化及び患者ニーズの多様化等医療を取り巻く環境の変化に対応した病院再開発を目指す。【46】

病院再開発の整備方針及び整備計画に基づき、既設病棟（東病棟、西病棟）、中央診療棟の各改修工事（再開発第2ステージ）の着工を行う。また、既設外来診療棟等の改修工事（再開発第3ステージ）の実施設計を行う。

6 先端医療の確立と研究成果を医療現場へ還元するため、1）先端医療研究と臨床応用をカップリングし、2）PET事業の拡充・推進、FUS（集束超音波手術装置）による自由診療・臨床研究を推進する。

また、臨床試験センターにおける臨床研究部門と治験部門の業務を拡充し、CKD（慢性腎臓病）ネットワークの活動、臍帯血治療、抗がん剤感受性による個対応治療（より個人に適切に対応する「個の医療」）、慢性呼吸器疾患の治療、人工膵臓の実用化への進展、DVT（深部静脈血栓症）予防法の実用化、嚥下・排泄・感覚機能の治療、血球粒度、電気泳動波形データを用いた診断支援システムの開発、細胞移植医療センター（仮称）の設立、がんペプチドワクチンの臨床応用を実現する。【47】

1）先端医療の確立と研究成果の医療現場への還元に向けて、先端医療研究と臨床応用のカップリングを推進する。
2）多能性を持った臍帯血幹細胞に関する臨床研究及び臨床応用を推進する。
3）高精度放射線治療システム、PET事業、FUS治療の充実及び臨床研究を推進する。
4）次世代医療創造センターにおいて、先端医学研究シーズの実用化、質の高い臨床試験の実施を推進する。
5）遠隔操作型内視鏡外科手術装置（ダヴィンチ）を使用した先端医療の充実及び安全な適応疾患の拡大を図る。

7 パートナーシップに基づく地域医療を実践するため、1）高齢化先進県に即応した療養環境の充実と地域連携並びに、2）電子カルテ・PACS（医療用画像ネットワーク管理システム）に代表される院内医療情報の電子化をさらに推進し、3）高知ヘルスシステム（高知県の地域医療を担う病院,診療所が県民の健康の維持・増進のためにパートナーシップを結ぶ地域医療システム）を用いた地域関連病院との情報共有に役立て、4）検診業務サポート・地域の健康管理などの予防医学、5）地域関連病院と連携した在宅医療サポートにも貢献する。このことにより、地域連携数や退院支援件数、さらには検診業務と在宅医療のサポート実績を向上させるとともに、電子カルテ・PACSを充実する。【48】

1）健康長寿の要因に関する分析結果を用いて、地域医療及び地域連携に関する研究及び取り組みを推進する。
2）カルテ及び医療用画像の電子化の運用をより充実するとともに、在宅医療・介護連携のICTシステムを構築し、在宅医療のサポートを推進する。
3）高知県内医師のキャリア形成支援プログラムを策定する。

8 医学から医療学へのパラダイム変化に対応するために、1）卒前から卒後にかけて、模型（シミュレータ）やソフトウェア、あるいは模擬患者の協力によるシミュレーションを通じた教育を充実し、また、2）医師・看護師・技師・薬剤師等全ての職種にリカレント教育（社会人教育）、生涯学習の場を提供する。このために、スキルスラボ及び低侵襲手術教育・トレーニングセンター機能をより充実させ、卒後研修医数、リカレント学習受講数、院外啓発活動数の増に繋げる。【49】

1）臨床技能及び遠隔操作型内視鏡外科手術等に関する教育を継続するとともに、新専門医制度に対応した教育を推進する。
2）高知県と連携し、指導医・専門医支援、国内・海外留学支援及び女性医師の復帰支援を推進する。
3）看護師や薬剤師の実習、研修及びリカレント教育を推進する。

「禁煙について～タバコを知る～」

総合診療部

私たちの禁煙外来では、「一生我慢」する禁煙ではなく、「タバコと縁を切る」ことを目標にしています。このためには、正しいタバコの理解のもと、自発的に行動することが大切であり、これをサポートするのが医療スタッフの役割です。

（1）タバコの煙を知る！

下の表に示すように、タバコの有害成分は発がん作用だけでなく、各器官の炎症に関与しています。また、慢性的な低酸素状態と血流不全は、頭痛や肩こり、冷え性や手足のしびれ、だるい、疲れやすい、といった日常の何気ない症状にもつながります。

（2）タバコ依存（身体依存と心理依存）を知る！

ニコチンには覚せい剤と同様、ドパミン、ノルエピネフリンをはじめとする神経伝達物質の遊離を促進する作用があり、気分や自律神経に影響します。しかし喫煙によるニコチン血中濃度は急上昇後、速やかに消失するため、離脱症状（集中力の低下、易刺激性など）をきたし、身体依存に陥ります。重要なことは、喫煙はこの離脱症状を押さえることはできても、その他の様々な害を超えるプラスの作用はないということです。「タバコが集中力やストレスを改善してくれている」という、心理的な依存状態に陥っている方もいますが、タバコが改善できるストレスは、「タバコ切れ」のストレスだけなのです。

禁煙を勧めるなら、タバコを「知る」ための情報を提供し続け、本人に気づいてもらう必要があります。あなたの声掛けから始まる禁煙もあるかもしれません。

タバコに含まれる有害物質

●粒子相成分

有害物質	含量（μg/本）	身体への悪影響
カテコール	460	粘膜障害
アルカロイド類	200	植物性神経作動薬
ニコチン	100	依存性、血管収縮
メチルカテコール類	40	発がん物質
ヒ素	25	発がん物質
ナフタレン	10	アレルギー誘発
ニッケル	0.6	発がん物質
ピレン	0.2	薬剤代謝酵素誘導
カドミウム	0.07	イタイイタイ病
ベンゾ(a)ピレン	0.05	発がん物質

●ガス相成分

有害物質	含量（μg/本）	身体への悪影響
一酸化炭素（CO）	20000	酸欠、多血症
ニコチン	1900	依存性、血管収縮
アセトアルデヒド	1400	繊毛上皮障害
窒素化合物（NO）	600	光化学スモッグ
シアン化水素	200	血管・気道障害
アンモニア	150	ニコチンをガス化 粘膜刺激作用
ホルムアルデヒド	90	シックハウス症候群
ジメチルニトロサミン	0.2	発がん物質
ダイオキシン	0.9pg-TEQ	発がん物質

［禁煙外来のご案内］
毎週水曜日・奇数週金曜日の午後（予約制）
※詳細は、総合診療部外来におたずねください。

先端医療学コース学生顕彰制度「相良賞」

先端医療学推進センター長　本家　孝一

研究は将来の学問に対する投資です。医学生が在学中に修得する知識や技術は過去の遺物です。知識量は年々指数関数的に増加していますので、医師は過去の知識を知るだけでは不十分で、未来の高度医療に対処できる能力をもつことが求められます。

受賞者を囲んで

『先端医療学コース』では、医学という科学原理の思考と、最先端医療開発研究の実践を通して課題を探求し解決する能力を磨き、主体性とリサーチマインドを涵養(かんよう)いたします。研究を行うには正規のカリキュラム時間だけでは不十分なので、放課後や休日にも研究をしなければならないこともありますが、学生達は頑張って研究しています。その甲斐あって、研究成果を学会で筆頭演者として発表し、優秀演題賞を受賞する学生が出て来ました。

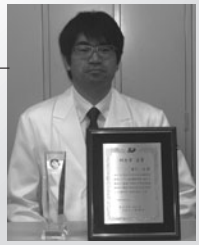
本学でも独自に優秀な学生を顕彰するために、先端医療学推進センターの産みの親である相良祐輔前学長の名を冠した『相良賞』を平成23年度から授与しています。昨年(平成26年)度は、三年間の研究成果を評価する金賞を4年生1名(現5年生)が、学年毎に1年間の研究成果を評価する銀賞を3年生1名(現4年生)と4年生2名(現5年生)が受賞しました。今年度の最初の授業日(平成27年4月13日)に三学年の『先端医療学コース』履修生全員を集めて、相良賞授与式と受賞者による研究発表を行いました。授与式にひきつづき、東京大学名誉教授・高知大学特任教授・次世代がん研究シーズ戦略的育成プログラムグループリーダーの清木元治先生に、「臨床への還元を目指したがんの基礎研究」という演題で記念講演をしていただきました。【写真参照】

記念講演会

将来、地域医療を目指す学生諸君にとっても、科学的思考能力は不可欠であり、『先端医療学コース』はこれを身につける絶好の機会です。是非、『先端医療学コース』にチャレンジして相良賞をゲットしてください。

相良賞「金賞」を受賞して

医学科5年　重久　立



「え、それはドッキリか何かでしょうか…?」

研究室で松崎先生から結果をお聞きした時に浮かんだ、私の正直な感想です。この度は相良賞金賞という栄えある賞をいただきましたこと、大変光栄に思います。指導して下さった先生方やアドバイスを下さった先輩方や同級生、イラストを提供してくれた後輩。沢山の方々に支えられての結果だと心の底から思っています。本当に有難うございました。

私が所属していたファージ療法研究班では、細菌に感染するウイルスであるバクテリオファージ(以下ファージ)を利用した感染症治療についての研究を行っています。近年、薬剤耐性菌が世界中で問題となっていますが、ファージ療法はそれら薬剤耐性菌に対する切り札として欧米で注目されています。

私は2、3年次にファージの分離方法や構造解析について学び、最終年度にファージと抗菌薬を組み合わせた際の溶菌効果の変化についての研究を進めました。ファージと抗菌薬を組み合わせた研究は世界でもほとんど例がないため、組み合わせることで生じる現象を一つ一つ整理し、その効果の判定方法を一から独自に考案する必要がありました。しかし、多くの実験と検討を積み重ねることで、どうにかファージと抗菌薬を適切に組み合わせると、ファージの溶菌効果が増強される可能性があることを突き止めることができました。

元々は研究自体にはあまり興味がなく、人生経験と思い先端医療学コースを選択しましたが3年間ですっかりその魅力に取り付かれてしまいました。研究の道からはしばらく離れることになりますが、将来的には臨床と研究を両立させられる医師になり、世の中の役に立てたら、と思っています。

新任の挨拶

「新任のあいさつ」

医学部・病院事務部会計課長　**浦田 明宏**

平成27年4月1日付けで、会計課長として鳥取大学医学部から赴任してまいりました。

鳥取大学では、医学部の所属で特に病院を主体として26年間勤務しておりました。

法人化直前直後は経営改善の担当をしておりまして、非常に厳しい時代を経験させていただきました。この経験を高知大学で活かすことが出来たらと思っております。特に、本院では再開発の真只中であり、これから再開発で借り入れた費用を返済していかなくてはなりません。そのため、さらなる健全な経営を維持するために、病院収入確保、経費節減に取り組み、微力ながら頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

「新任のご挨拶」

医学部・病院事務部学生課長　**松田 政盛**

平成27年4月1日付けで、医学部・病院事務部学生課長として、4年1ヶ月ぶりに高知工業高等専門学校から、医学部に帰ってまいりました。教職員の皆様には温かく迎えていただき感謝しています。

4年の歳月は、各キャンパスにおいて事務の一元化がなされ、学務部岡豊学務課及び岡豊入試室は、医学部・病院事務部の学生課所属となり、業務責任の明確化が図られ、仕事上の範囲も広がっています。

業務においては、学生と社会に対する責任をとれる教育への対応、医師国家試験への対応、医学教育認証評価制度への対応、大学院入試における志願者の確保など課題がありますが、これまでの経験を活かし精一杯取り組んでいきたいと思います。

今後もより一層、学生の立場に立って対応し、いつでも気軽に立ち寄っていただける学生課をめざしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

その他の異動　◆総務企画課長に高橋 聡 課長（学生課より異動）　◆医事課長に都築 泰仁 課長（総務企画課より異動）

救急部 新 スタッフ紹介

救急部 特任講師　**門田 知倫**

4月から救急部に勤務することになりました門田です。こちらに来るまでは高知医療センターで1年間救急医療に携わってきました。専門は脳神経外科です。もともと高知県出身で、大学で県外に出て以来ずっと県外で働いていましたが、東日本大震災を機に高知に戻ってきました。高知県の救急医療と災害医療の底上げを目指して頑張りたいと思います。また脳神経外科救急にも取り組んでいきたいと思います。

救急部 特任助教　**濵田 知幸**

4月から救急部に配属になりました濵田知幸です。私は、循環器疾患が専門でこれまでは虚血性心疾患に対するカテーテル治療を中心に診療してきました。当院の救急部は脳神経系と循環器系の救急疾患を主な対象としていますが、2次救急病院としては、できる限り地域からのニーズにもこたえていかなければならないと思います。そのためには各診療科の先生方のご協力が必要です。どうぞよろしくお願いいたします。

救急部 特任講師　**古田 興之介**

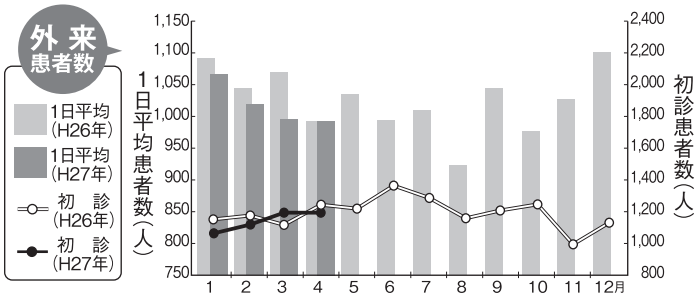
「救急部へのご理解、ご協力をお願いします」

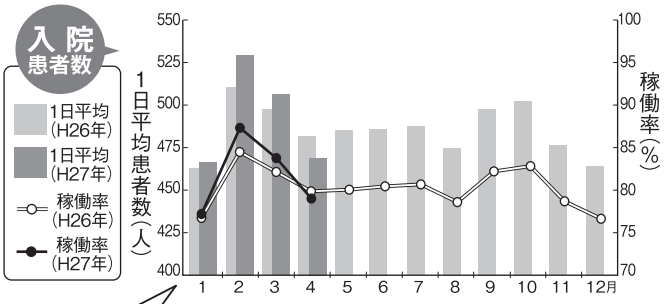
専門は神経内科（特に脳卒中）で、福岡県から赴任しました。特定機能病院の要件見直しにより、救急科がないと高知大学医学部附属病院は特定機能病院を取り消される可能性があります。よって県民への医療を維持向上するためにも、救急部に対する皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。また存続には、救急専門医を目指す若い医師の定着が必須条件です。救急・災害医療や神経救急に興味ある医学生・研修医諸君、ぜひ一緒に盛り上げていきましょう!

救急部 特任助教　**楊川 寿男**

高知大学医学部を卒業後、高知県立幡多けんみん病院で初期研修、引き続き同院脳神経外科で働かせて頂き、この4月から高知大学医学部附属病院救急部に赴任することとなりました。救急部では、脳卒中、心筋梗塞を積極的に受け入れていく方針であり、他のメンバーとともに、少しでも皆様のお役にたてればと思っております。どうかよろしくお願い致します。

診療状況





3月は、昨年同月に比べて1日平均患者数・稼働率ともに増加して比較的高い値となった。しかし、病棟や手術部移転の影響で4月は3月に比べて患者数・稼働率ともに大きく減少。

編集後記

昨年度、病院ニュース編集委員会の委員を務めさせていただき、今年度は委員長の大役を仰せつかることとなりました。医学雑誌編集委員の立場として、編集作業に携わってきた経験を活かして、読者にとって読みやすく分かりやすい広報誌になるように、1年間頑張りたいと思います。

新病棟が完成し、附属病院はネクストステージを迎えました。附属病院の今後の展望を知っていただくために、年度計画（平成27年度）、中期目標・中期計画について総務企画課に解説していただきました。附属病院にとって、救急部の充実は長年の課題でした。今年度、救急部のスタッフが増員されましたので、紹介させていただきます。このように、附属病院は確実に前進していることを読み取っていただければと思います。

全職員が職場に誇りを持ち、モチベーションを向上できるような病院ニュースを目指したいと思いますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

（文責:福島　敦樹）